ライフスタイルを変えると住まいも変わる

www.elle.co.jp/decor/

ELLE DECOR JAPAN no.172

特別付録
iittala ポストカード
3枚セット

エル・デコ
OCTOBER 2021
the world's
leading
design&
lifestyle
magazine

Magazine Cloud
電子版でも読めます

イッタラLOVE!

ローカル発!
最旬デザインスポット

アート好きの
コレクション拝見!

ヴィンテージ家具を
もっと身近に

ニコライ・
バーグマンさんの
理想郷を公開!

NEW LIFE, NEW HOME

どこに住む? どう暮らす?

理想の住宅

MODEST **HARMONY**

新旧アートとデザインの幸福なマリアージュ

きわめてクラシカルなオリジナルの内装をベースに、
素材やフォルムの全く異なるモダンデザインや現代アートを配置。
建築家のジャン＝ルイ・ドゥノワが手がけたパリのアパルトマンには
新旧のスタイルが共鳴し合う、穏やかなエレガンスが満ちていた。

Photos CHRISTOPH THEURER　Original Text SYLVIE THEBAUD　Text RITSUKO ABE

モダンデザインとアートが日常を高揚させるリズムを刻む

オリジナルの壁を残したリビングは、淡いグレーのグラデーションと繊細な木工装飾がクラシカルな雰囲気を醸す。有機的なフォルムのローテーブル「トレフル」の横には、クヴァドラ社のテキスタイルが張られたソファ「バンコク」が。壁に飾られたジェローム・ロブの写真作品が家主のセンスを代弁する。

パリの中心、チュイルリー公園に面した200㎡を越える広大な邸宅。最高のロケーションに立つこのアパルトマンを改装するにあたり、熟練した手腕で知られる〝内装家〟ジャン＝ルイ・ドゥノワに白羽の矢が立てられた。

色と時代を重ねて生まれた家具とアート作品のハーモニー

19世紀末の典型的なオスマン様式のこのアパルトマンは1950年代、ハイエンドな家具を手掛ける「メゾン・ジェンセン」によって初めての改装が行われていた。2度目となる今回の改装は、新たなオーナーからの要望だった。

「私の役割はメゾン・ジェンセンも敬意を払った〝軽やかさや美しさ〟といったオリジナルの魂を損なうことなく、時代に即したモダニティな雰囲気を取り入れ、家主の趣味であるコンテンポラリーアートと共存させることでした」とデコレーターのジャン＝ルイは語り始めた。彼はまず家全体のボリュームを丁寧に再計算し、レイアウトを新たに構築する作業に取り掛かった。

玄関ホールはカボションカットが施された大理石を敷いた床を残し、壁には現代アーティストのマティアス・キスによるトロンプルイユのマーブル模様を配した。ここから繋がる各部屋にはシルクのカーペットと淡くパウダリーなトーンをキーカラーに、同じ世界観を作り上げた。

"旧い家の魂を失うことなく、現代アートとモダンな家具を融合しました"

「すべての要素を共鳴させる私のスタイルは、まず色の選定とその積み重ねからスタートするのです」

ジャン＝ルイの言葉通り、メインルームのリビングにも繊細な色が溢れる。四季と共に姿を変える公園の風景をキャンバスに、濃淡の美しいグレーやブルー、砂糖菓子のように甘いピンク、光をもたらすシルバーやゴールドが点在する。

そして完璧な色の調和のもとに古典的な装飾とモダンなヴィンテージ家具、現代アートが混然一体となった空間が誕生した。万華鏡のように新たなスペースが展開される様子は、作品やデザイン家具が生きる喜びを表現しているかのようだ。

「ただし不協和音のような、計算されたささやかな刺激も装飾の楽しみ方のひとつなのです」と彼はいたずらっぽく微笑む。

それは書斎に置かれたブロンズの重厚な飾り棚の前に'70年代に流行したメラミン製のアームチェアをあえて合わせたり、19世紀の暖炉の上にモノクロの写真作品を飾ったりという彼なりの遊び心。異質なオブジェ同士がもたらすハーモニーやエネルギーの衝突をこっそり楽しんでいるように見える。

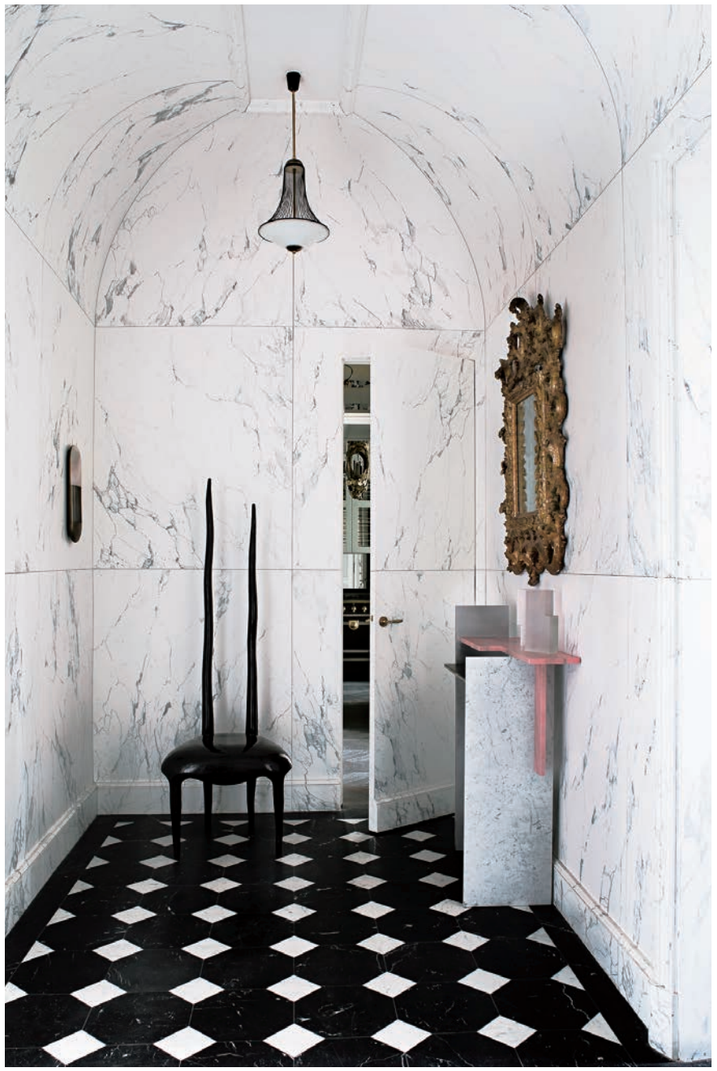
「私にとって内装とは人生そのもの。あらゆる世代、異なるルーツを持つ隣人と過ごす日常生活のようなね。この刺激的な対話がない毎日なんて、生きる意味のない人生と同じではないでしょうか？」

世代を超越した芸術とデザインの競演

リビングの一角にはベルギーで購入した'50年代の木製テーブルに同年代のデンマークチェア「リング」を配した。ジュリア・カニンによるセラミックとテオレオギャラリーで見つけた'60年代製のベースに手描きのランプシェードを合わせた照明が並び、René Galassiの絵画と時代を超えて呼応する。

色と体積の完璧な見極めがさりげないリュクスの鍵

「リビングは人と人との相互作用を生み出す場所だから」とあえて不規則に椅子を配置。ブルーのテーブルにソファ、淡いピンクのクッションやスツールと、色の効果的なリフレインが楽しめる。コーヒーテーブルの上には、'70年代の樹脂製の花瓶とルイ16世時代の燭台が並ぶ。キャビネットの上のランプシェードは'50年代にロサンゼルスで購入したもの。



スタイリッシュな印象の“大理石”が迎えるエントランス

オリジナルのツートンカラーの大理石の床から始まる玄関ホール。規則的なパターンの上には直線と曲線で構成されたR&Y オーグスティがデザインしたブロンズ製のチェア「シルヴィ」を置いて。優雅なアールを描く天井と壁は大理石を模したトロンプルイユで、アーティストのマティアス・キスが手がけたもの。

静謐な輝きを秘めたモノトーンのグラデーション

廊下の突き当たりに位置するキッチンスペースは、今回の改装で鏡の両開き扉でダイニングと繋がった。壁や食器棚にも鏡面仕上げの加工が施され、常に光を感じさせる明るいキッチンとして再生された。単調さを嫌うジャン=ルイの意図により、ガス台や床にはシックなダークカラーを採用し印象を強めた。

海辺を連想させる爽やかなダイニング

ダイニングルームの中心となるのは18世紀に製作されたロッククリスタルのシャンデリア。透明な泡を思わせるこの照明とフロランス・ジレットが描いたジャクソン・ポロック風の壁紙が完璧なアンサンブルを奏で、海辺にいるようなムードをもたらす。テーブル上のセラミックランプが軽快な印象を与えてくれる。

異なるふたつの世界観がベッドルームでスパーク

内装家は寝室にふたつのスタイルを仕込んだ。ひとつは画家のマティアス・キスが描いた壁の腰板やベッド、グレーのクッションの大理石模様。もうひとつはよりモダンな要素で、エルベ・ヴァン・デル・ストラッテンの照明、フィンランドのマッティ・クヤサロによる円形の作品「Lilac-Yellow2016」、ピエール・マルベックの絵画による幾何学的世界観だ。

異素材と造形美をミックスして傑出したエレガンスを表現

クラシカルな装飾が現代アートの自由な空気を受け止め、新たなエレガンスが誕生。改装前から置かれていたブロンズとステンレスの書架はメゾン・ジェンセンのもの。エットレ・ソットサス作のマーブル模様の椅子「テオドラ」を合わせた。'50年代に作られたソファはオランダのブランド、アーティフォート社のもの。